武蔵野日曜集会

夫婦・親子・主従

――エペソ書第5章22節～6章1～9節――

１９９２年３月１日（武蔵野）
小池辰雄

夫たる者よ　捨て身の愛　本ものが来ているか　妻たる者よ　０＝１＝８　親たる者よ　神品
聖意体現　救いの根源現実

【エペソ5】

22妻たる者よ、主に服うごとく己の夫に服え、23キリストは自ら体の救主
にして教会の首なるごとく、夫は妻の首なればなり。24教会のキリストに服
うごとく、妻も凡てのこと夫に服え。25夫たる者よ、キリストの教会を愛し、
之がために己を捨て給いしごとく汝らも妻を愛せよ。26キリストの己を捨て
給いしは、水の洗をもて言によりて教会を潔め、これを聖なる者として、
27汚点なく皺なく、凡て斯のごとき類なく、潔き瑕なき尊き教会を、おのれ
の前に建てん為なり。28斯のごとく夫はその妻を己の体のごとく愛すべし、
妻を愛するは己を愛するなり。29己の身を憎む者はかつてあることなし、皆
これを育て養う、キリストの教会に於けるも亦かくの如し。30我らは彼の体
のえだなり、31『この故に人は父母を離れ、その妻に合いて二人のもの一体
となるべし』32この奥義は大なり、わが言う所はキリストと教会とを指せる
なり。33汝等おのおの己のごとく其の妻を愛せよ、妻も亦その夫を敬うべし。

【エペソ6】

1子たる者よ、なんじら主にありて両親に順え、これ正しき事なり。2『な
んじの父母を敬え（これ約束を加えたる誡命の首なり）3さらばなんじ幸福を得、
また地の上に寿長からん』4父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、ただ主の
薫陶と訓戒とをもて育てよ。
5僕たる者よ、キリストに従うごとく畏れおののき、真心をもて肉につけ
る主人に従え。6人を喜ばする者の如く、ただ目の前の事のみを勤めず、キ
リストの僕のごとく心より神の御旨をおこない、7人に事うる如くせず、主
に事うるごとく快くつかえよ。8そは奴隷にもあれ、自主にもあれ、各自お
こなう善き業によりて主より其の報いを受くることを汝ら知ればなり。9主
人たる者よ、汝らも僕に対し斯く行いて威嚇を止めよ、そは彼らと汝らとの

主は天に在して、偏り視たもうことなきを汝ら知ればなり。

●夫たる者よ

今日はエペソ書の5章22節から6章9節までです。夫婦関係や親子関係や主従関係のことをパウロが書いている。よく、結婚式の時に、このところを牧師さんが読むんですが、私はほとんど結婚式でも読まない。

22妻たる者よ、主に服うごとく己の夫に服え、23キリストは自ら体の救主にして教会の首なるごとく、夫は妻の首なればなり。24教会のキリストに服うごとく、妻も凡てのこと夫に服え。

今の若い人には、こんなことを言われると、そんなのは男尊女卑で、鹿児島みたいだと思うでしょうけれども、パウロははっきりこう言っている。藤井先生がこの結婚観なんです。藤井先生の奥さんは、絶対服従だったらしい。ま、素晴らしい奥さんだったから、それでよかったんでしょうけれども。

その次に「夫たる者よ云々」とあるけれども、私は、これはパウロに文句を言いたい。これはまず、

「夫たる者よ」

から先に言わなくてはいかん。一家の責任者は夫なんですから、先ず、夫に責任者の自覚を持たせ、それから、奥さんのことを言うべきで、いきなり、「妻たる者よ」と命令的に言うのはどうかと思うんで、パウロさんに私は抗議を申したい。

それで、私はその25節からやります。

25夫たる者よ、キリストの教会を愛し、之がために己を捨て給いしごとく汝らも妻を愛せよ。26キリストの己を捨て給いしは、水の洗をもて言によりて教会を潔め、これを聖なる者として、27汚点なく皺なく、凡て斯のごとき類なく、潔き瑕なき尊き教会を、おのれの前に建てん為なり。28斯のごとく夫はその妻を己の体のごとく愛すべし、妻を愛するは己を愛するなり。29己の身を憎む者はかつてあることなし、皆これを育て養う、キリストの教会に於けるも亦かくの如し。

まず、主たる「夫たる者」から言うべきである。だから、順序をひっくり返して読みます。先ず、主導力は上からなんですから、下の者にこうせよと命令するのは、順序が間違っている。

「夫たる者よ、キリストの教会を愛し之がために

愛は神さまからきているということは、ヨハネも言っているとおり。キリストが召団を愛する。主導者が――「アルケーゴス」と言いますけれども――主導者がどうであるか。

「キリストは首で、教会は体である」

とパウロが言っているとおり、我々の肉体の存在も、頭が一番大事なところで、そこに一

切の働きの原動力がある。だから、キリスト・主・夫、それが教会を愛するごとく、妻を愛せよと。

●捨て身の愛

その愛し方は、

「己を捨てたるごとく」

という、捨て身の愛なんです。ただ、可愛がるなんていうんじゃない。夫は、キリストは、教会のために己を捨てられた、贖罪のために。しかも、今度は活かすために復活された。それで、我々に復活の生命がくる。また、御霊を与える。みんな上からの絶対恩寵です。

それに感激するんだから、その先の大事な主導的なところを言わないで、「妻たる者よ」なんて言ったって、これはダメなんだ。だから、これは確かに順序が間違っている。そんなことはどの注解書にもおそらく書いてないでしょう。

我々は、個人個人もキリストの捨て身の愛で救われたんだから。問題は、

「それを本当に受けとるか」

ということ。信仰というのは、

「愛に感激する」

のを信仰という。

「分からないけれども信じておこう」

なんて、そんなのではない。キリストの愛は天来の愛、「天愛」だ。それを全身で受けとる、体受する。これが信仰なんです。

「なにか分からないけれども、偉い人があるから、それを信ずる」

なんて、そんな信仰では苦しくて、しまいには嫌になってしまう。

我々は受け身で愛される。愛されたから、その愛でもって、愛には愛で応える。信仰で応えるのではないんだ、本当は。愛には愛で応える。信には信をもって応える。「信ずる」というのは、上から、このしょうがない者を信じてくださるから、それで、これをもって応える。しょうがない者を愛してくださるから、それをもって愛せざるを得ない。信ぜざるを得ない、愛せざるを得ない。そのざるを得ない世界に自分が置かれないことには、人間は動けない。みんな、偉そうな顔をしたってダメなんだ。これは本当にそうです。だから、楽で力が来るというのはそのことなんです。

これは絶対恩寵です。浄土真宗。私の詩は、福音も仏教もみな出てくるから面白い。世界の、古今の真理を総なめしてやる。烈々たる詩を書きますからね。皆さん、期待していてください。これはもう20世紀を突破してから出ます。

●本ものが来ているか

「生命賭けの愛で愛されたから、こっちも生命賭けで自分を捨ててかかりましょう」と、これが本当の信行の現実だ。だから、信じ行く、「信行」と書く。交わる、「信交」。ただ、仰いでいる（信仰）のではない。昔の常用語を、この辺でもう宗教改革をしなければダメだ。私はなにも特に異を好んで言っているわけではない。

「捨て給いしごとく」

と。これははっきり、パウロの言っているとおりです。

「キリストが教会を、エクレシアを捨て身で愛してくださった。そのように、お前は妻を愛すれば、妻の方はもう喜んで従う。喜んで従わざるを得ない」

と。私は「服従」という言葉は嫌いだ。絶対服従なんて無理がいく。「愛従」なんていう言葉はないけれども、楽しんで従う、「楽従」なんだ。「従う」ということは、要するに、夫と「同じ心になる」ということだ。それだけの福音の受け方を日本の男子がしているか。暁の星ほどいるかいないか。私自身がそうである、なんては言いませんよ。限りなくそれを望んでいるだけのはなしだ。

だから、キリストの直弟子の次元に、私たちは中心を本当にもたなければダメなんです。捨て身の愛なんだ。夫が妻を捨て身の愛で愛したら、妻は喜んで従わざるを得ない。「従う」という言葉がもう合わないくらいな気持になる。

そして、その後で、

水の洗をもて言によりて教会を潔め、これを聖なる者として、27汚点なく皺なく、凡て斯のごとき類なく、潔き瑕なき尊き教会を、おのれの前に建てん為なり。

と。パウロは行き過ぎているね、こんな言い方をして。そんな教会はどこにも在りはしない。教会は破れ教会でいい。人間は破れの器なんだ。それを整えようとしたって、それは無理なはなし。そんなところまで行けっこないんだ。これは天国のはなしです。パウロさんが書いたから、読みますけれども。

教会にしろ、幕屋にしろ、召団にしろ、相対的な人間の団体なんてものは、決して完璧にはならない。己の破れを自覚して、そこに本当に、

「形なき本ものがそこの中に入るか」

と。それだけが問題。人間の生まれつきの才能はいろいろです。それから、性格もいろいろです。そんなものを比較研究したって、どうにもならん。

「甲がこうだ、乙がああだ」

と、そんなことをいつまで言ったって、始まりません。問題は、

「そこに本ものが来ているか」

だけが問題。生まれつきのいろいろなハンディキャップがあるからね。生まれつき非常に

頭のいい人もあるし。そういうことがその人の価値ではない。その人の価値は、

「本ものを本当に受けとっているか」

と、そこだけ。それがどんなに実行においてまだ不完全であろうとよろしい。その本ものに生きようとしている意気込みだけが大事なんです。カントの道徳哲学にその角度から言っている言葉がある。さすがはカントだと思った。

「生まれつき恵まれない人が一生懸命でやろうとしているその姿が美わしいのだ。生まれつき優れている者は何も努力しなくてもできる。それは、それ自身は結構なことだけれども、道徳的価値としては、善意志をもって努力しているその姿が大事なんだ」

と。ですから、先生が生徒を見るときも、そうなんです。できる生徒ばっかりを相手にしているような先生ではダメです。できない生徒がどれだけ本当に努力しているか、その姿だけでもう落第点をやらなくていい。

●妻たる者よ

28斯(かく)のごとく夫はその妻を己の体(からだ)のごとく愛すべし、妻を愛するは己を愛するなり。

「妻を愛するは己を愛するなり」なんて、余計なことを言わなくていい。パウロは少し言いすぎのところがある。本当は自己愛はダメなんだ。

「己を捨てている」

という言葉と矛盾している。自己愛は人間の本能です。その本能の「自己愛」を、逆に、「他愛」にもっていくわけだ。他愛にもっていって生きていたのは、キリストなんだ。キリストは自分を何者ともしなかった。シナの教えでは、荀子(じゅんし)だね。

29己の身を憎む者はかつてあることなし、皆これを育て養う、キリストの教会に於けるも亦(また)かくの如し。30我らは彼の体のえだなり、31『この故に人は父母を離れ、その妻に合いて二人のもの一体となるべし』32この奥義は大(おおい)なり、わが言う所はキリストと教会とを指せるなり。33汝等おのおの己のごとく其の妻を愛せよ、妻も亦その夫を敬うべし。

キリストと教会が一体である。夫婦が一体である。体は二つなんだけれども、それを「一体」という言い方をするわけだ。もともと、アダムからイブができた。これは神話だよ。神話だけれども、

「人というものが男と女に別れた」

という。そういう神話の構造は素晴らしい。だから、本来、「二」でありながら「一」であるということです。

「肋骨の一つから女を造った」

なんて、そんなバカげたことがあるかと。それは文字通りにはバカなことだ。けれども、それの意味するところは深い。神話というものをその角度から読まなかったら、本当の意味で神話は読めない。

だから、そういう夫だったら、それはもう楽に妻は従う。そして今度は「妻たる者よ」と、

22妻たる者よ、主に服うごとく己の夫に服え、23キリストは自ら体の救主にして教会の首なるごとく、夫は妻の首なればなり。24教会のキリストに服うごとく、妻も凡てのこと夫に服え。

キリストはそのようにして愛してくださったから、そのような夫に妻は従いますよ。順序を逆にすれば、「従え」ではなくて、「従うね」とこう書くんだ、パウロは。私ならそう書く。「従え」と命令しない。

「従わざるを得ませんね」

と。それが本当の福音の世界です。

ところが、日本では、なかなか現実には大変だよ、奥さんは。天国は、女性の方がたくさんいるでしょうね。悪い事をする大部分は男だものな、犯罪をみても。日本は本当に福音を受けとっていない。だから、とにかく一人一人が、あなた方は伝道者ならざるを得ないんです。福音を存在をもって伝えざるを得ない。

「存在をもって伝えざるを得ない」

ということにならなかったら聖書をやめたらいい。

これは教訓ではない。「キリスト教」なんていう言い方は嫌いなんだ。私は50年間、教師だったけれども、「教」の字は大嫌いだ。学徒、学ぶ方。人間は終りまで学ばなければいかん。生徒と一緒に学ぶ。皆さんと一緒に――語るも聞くも同じこと――私は一緒に学んでいる。一緒にキリストから聞いている。聖霊の力でね。

「教える」という意識だったら、文学もダメです。

「この文学で、どういう理念を言ってやろう」

なんていうのはダメです、そういう文学は。二流の文学になる。知らない間に真理が告白されている。それで読みながら、「参った」というのが本当の文学の世界です。ダンテやゲーテはそうなんだ。何もダンテやゲーテに限りませんが。お互いに自ずから、

「そうだ、その通りだ」

という「告白」です。鳥は鳴かざるを得ない、飛ばざるを得ない。みな、ざるを得ない世界で動いている。語らざるを得ない、為ざるを得ないということ。

●０＝１＝∞

だから、「妻たる者よ」なんて、こんなところを読まなくても分かってしまう。夫のところを読めば、もう、妻たる者はどうであるかということは、自ずから分かってしまう。

31『**この故に人は父母を離れ、その妻に合いて二人のもの一体となるべし**』

「キリストとエクレシアは一つだ」

と。夫婦一体。みんな、本当の世界は「一つ」の世界です。一如の世界。即如。「如」という字は妙な字なんだ。女偏に口でしょ、何か言われると女の人はそれに従うというのが、この「如」という字のもともとの字だという。「その言葉の如くなる」という。ドイツ語でも、

「女性にはイッヒ（私）がない。私というものがない」

という言葉がある。本当は素晴らしいことなんだ。私心がない。無私なんだ。

だから、女のかたの方が信仰に早い。もともと私の無いという姿なんです。キリストに躓かなかったのはむしろ女性だった。弟子たちはみんな躓いて、やっと後で目が覚める。女の人はスーッといくんだね、男は一遍ギュッとカーブしていく。ダメなんだ、男性は大体が。まず、ひっくり返されてから、それからグーッといく。パウロなんかははっきりしている。まずひっくり返されてから、それから上がっていく。

「**我は罪びとの首なり**」

と言わざるを得なかった。そうやって、福音を掴まされたこのパウロは凄いことは凄いです。何といったって凄い。

32**この奥義は大なり、わが言う所はキリストと教会とを指せるなり。**

一如の世界の奥義は大なり。その「一つ」も別な言葉でいうと、「無」なんです。

「我もなく汝もなし」

という世界です。その「一」は即ち、「無」と「一」と「無限」とがみな同じことになる。限りない。

「0＝1＝∞」

というわけです。もう、しゃべるのがいやになってしまうんだ、私はこういう世界に入ると。

●親たる者よ

エペソ書6章に入ります。今度は、

「**子たる者よ**」

だってさ。そうすると今度は、「生徒たる者よ」なんて。「先生」から始まらなければダメなんだ。「生徒はどうのこうの」ではない。

「先生自身がどうか」

ということ。そこが問題なんだ、学校でも。

「さっぱり勉強しない」

なんて怒ったってダメだ。先生自身が問題なんだ。

1**子たる者よ、なんじら主にありて両親に順え、これ正しき事なり。**

その通り。

2『**なんじの父母を敬え**（これ約束を加えたる誡命（いましめ）の首（はじめ）なり）
これはモーセの十誡の五番目のもの、
3**さらばなんじ幸福（さいわい）を得、また地の上に寿（いのち）長からん**』
これは旧約に書いてあるとおり。
4**父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、ただ主の薫陶（くんとう）と訓戒とをもて育てよ。**
お母さんを無視している。「母たる者よ」がない。「汝らの子供を怒らすな」と、とんでもない事が書いてある。
「**ただ主の薫陶と訓戒とをもて育てよ**」
この辺は少し次元が低い、パウロの言っているのは。
「父たる者よ、汝らの子供を怒らすな」
だぁ？　ダメだよ、これは。
「義と愛とをもって子供を育てろ」
と、私ならそう書く。今日は大分、パウロに文句を言う。「父たる者よ」とは、
「両親たる者よ」
でいい。父ばっかりでない。「親たる者よ」だ。親は子供を、義と愛をもって育てる。ただ可愛がったってダメだ。脊椎骨は義で、愛は肉だ。義と愛は離すことができない。日本刀も、強い鋼と柔らかいのと二つのもので日本刀はできている。あれと同じだ。
「義と愛をもって子供を育てろ」
ということ。キリストのだよ、この「義と愛」は。キリストの義、キリストの愛。我々はキリストの義と愛でもって救われた。このキリストの義に応えられないのが「罪びと」なんだ。だから、それを全部、贖ってくださった。それが愛なんだ。叱る時ははっきり叱れ。しかし、それは本当に愛しているからの叱りであって、憎いから叱っているのではない。
「神の怒は愛の別の現れ方だ」
と、ルターの言葉にもある。お父さんでもお母さんでも、そういう愛し方を、育て方をすれば、子供は間違いなくいく。ただ放ったらかしておいたらダメです。
先生が生徒を導くには、
「まず先生が自分でしっかり学べ」
ということ。勉強しない先生はダメだからね。そして、生徒の一人一人の素質をよく見て、その人その人らしい導き方がある。先生というのは、本当は非常に難しい。担任の先生が大事です。ある意味では、親よりも大事なところがある。先生と親とが一つになって初めて本当の教育ができるわけだ。その子の天賦の性格を、天から賜った性格、素質をよく認識して、それの特色をグッーと伸ばしていく。どれもこれも可い、なんていう必要はひとつもない。学校も、そうしたら、もう落第させない。
「この子はこれができていれば後はいいんだ」

と。私は校長の時にそういう角度から言った。

「語学の好きな者には語学を大いにやらせろ。数学の才能のない者には、しかしながら、数学でもこの点だけは覚えておけと、普段からはっきりと言いなさい。ちゃんとラインを引かせて。その最低の――最低というのは、根底になるところの大事な要素――それだけは必ず試験に出せ。そこの答案が書けていれば、他ができなくたって、落第点をやるな」

と。私は詩の中にもそんな事でも何でも書いてやる。

「人間はそれぞれの特色で社会のためにいくのだから、なにも大学に入ることが目的でも何でもない。その人の好きなことをやっていく。その代わり、そいつは本当に鍛えて、それで一人前にならなければダメだ。何だっていい。「大学、大学」と、大学に行くばっかりが能でない。何か手造りしたい人は、そこへ行って弟子入りしろ」

と、私は校長の時にも、そう言った。

●神品

神さまは一人一人を、模倣しないように天下一品に創っていらっしゃるんだから、でき損ないはない。創造の神の、創造神の、その自覚が足りない。全部、我々一人一人は「神さまの創造」である。だから、子供は神さまから預かったものなんです、本質的に言うと。神品なんだ。

そうするとすぐ、

「一体、神さまなんてどこにいるんだ？」

と。見たって、見えやしないよ。キリストが、神さまのことを

「お父さん」

と言っている。非常に躓きの言葉です。「お母さん」とは言わない、ただ「お父さん」と。自然科学的には分からないんだ、「父よ」なんて言ったって。霊神であり、人格神である。人格神と言ったって、それも分からない。

宗教的真理というものは、普通の頭の構造で分かろうとしたら、反って躓く。だから、なかなか信仰に入らない。何といったって、福音書のイエス・キリストにぶつかって、

「参りました！」

と、キリストに降参するまでは本当の世界に入れない。もうはっきりそうです。

「聖書は、ギリシャ語ではこうあるけれども、これはどういう意味だ」

と、そんなことではない。ギリシャ語はテンス（時称）が有りすぎて反って躓く。ヘブライ語の方はもっと簡単だからいい。信仰は常に現在だから、永遠の現在だから、永遠の現在において過去をも救い上げ、未来をも引き寄せる。これが信仰の現在です。

「信望愛」の「望」と言ったって、ロマンチックにただ望んでいるのではない。望も信も愛も全部、現実として受けとっていなければダメなんです。だから、もの凄く火のようになる。燃えている。炎を発していなくたって赤々と燃えている炭のようだ。

お父さんお母さんに、そのように義と愛とをもって導かれ愛されたら、子供は両親に

「はいっ」

と言って従わざるを得ない。

私の兄貴は、本当の信仰に入ったら、お母さんの言う事は、全部「はいっ」と言って従っていた。全部それを実行した。私もはっきりよく覚えています。決して口応えしない。何といっても、この兄貴のお蔭で私は今日があるんです。また、母のお蔭です。両方とも捨て身だもの。

その犠牲において私の今日はある。それの弔(とむら)い合戦、復讐だ。ドイツ語でいうと、「フェアゲルトゥングス　カンプ」「復讐戦」という。何をもって復讐するか。福音を告白することにおいて復讐する。あれはサタンの働きがあったんだから。

●聖意体現

5僕たる者よ、キリストに従うごとく畏れおののき、真心をもて肉につける主人に従え。6人を喜ばする者の如く、ただ目の前の事のみを勤めず、キリストの僕のごとく心より神の御旨(みむね)をおこない、7人に事(つか)うる如くせず、主に事うるごとく快くつかえよ。8そは奴隷にもあれ、自主にもあれ、各自おこなう善き業によりて主より其の報いを受くることを汝ら知ればなり。

「キリストの僕のごとく」は、ごとくではない、

「キリストの僕の僕らしく」

だ。「主に事うるごとく」は、

「主につかうる者らしく」

だ。「報いを受ける」ということはよくキリストも言われた。

「天界でそれが成就するよ」

ということ。御利益信仰ではないですよ、この「報いを受ける」ということは。いわゆる民間の御利益信仰は本当の宗教の世界ではない。それだったら、宗教は哲学よりも低くなる。聖意体現なんだから、この福音の世界は。神さまの意志を身体をもって現ずる。体とは全存在ということです。

9主人たる者よ、汝らも僕に対し斯く行いて威嚇(おびやかし)を止(や)めよ、そは彼らと汝らとの主は天に在(いま)して、偏(かたよ)り視たもうことなきを汝ら知ればなり。

説明的な事を言っているね、パウロは。このエペソ書のパウロは、所々ちょっと次元が低いので困ってしまう。

「私は国家の第一の僕である」(Ich bin der erste Diener des Staates.)

と、フリードリッヒ大王が言った。上に立つ者は僕である。それはキリストの言葉にもあるでしょ。

「主」は即ち「神の僕」なんです。キリストは神の僕です。使命的には、キリストは神の僕である。これが聖意体現なんです。本質的には、キリストは「父の子」なんだ。キリストは神の僕であり、父なる神の子である。子にして僕である。存在は「子」であるが、使命は「僕」なんです。使命的存在というのはそのこと。だから、本当に主たる者は、神・キリストの僕でなければ、僕を取り扱うことはできないということです。本当に僕を使うことが、愛することができない。

政治家では、エイブラハム・リンカーンが本当にその角度の人格だった。リンカーンの伝記を読むと分かる。リンカーン、グラッドストーン、ビスマルク、この三人は19世紀の偉大な政治家です。今のとケタが違う。少しああいうのを読んで、今の政治家も

「私は間違っていた」

と、はっきりとそう言う奴はいないかね。嫌になってしまうね、全く。

早く詩を書いて読ませなければいかんかな。20世紀を突破したのでは遅いかな。だけど、そんなに簡単に書けやしないよ、中身が大変だから。

「主人たる者はキリストの僕であれ。そうしたら、僕の本当の使い方ができるぞ」

と。そしたら、僕も、

「キリストに仕えるごとく…」

と、そこの所はいいですよ、「僕たる者よ…」と、パウロが言っているのはそのとおりです。相手はキリストではないけれども、そのつもりでやれと。そうすると、少しダメな主人も、

「私の方が悪かった」

と、僕の使い方で改まることもあろう、というわけだ。上がダメであろうと何であろうと、僕の姿そのものが素晴らしければ、上が変わってくる。上が素晴らしければ、下が変わる。要するに、

「一人一人が本当にキリストを体現するか」

と、ここだけが焦点になる。すべて問題の焦点は一人一人がキリストを本当に体現するか。それだけが焦点です。そうすると、夫婦関係も親子関係も主従関係も全部、解決していく。

●救いの根源現実

私たちは問題だらけだけれども、問題だらけでありながら、中心を持っているとあわてない。社長さんもそのとおり。学校の校長もその通り。担任の先生もその通り。親もそのとおり。そうすると、僕だの子供だの、奥さんだの、そういう相対的に下にある人たちが気持よく展開せざるを得ない。労使問題だとか、学校の組合問題なんか、あんなものは要らないんだ。「組合」なんてものは自分の利益の事ばっかり考えている。ダメだよ、そんな

ことでは。

そういう愛の体現では、賀川豊彦と新島襄、この二人は素晴らしい先輩だ。無教会の先生方よりか素晴らしい。無教会は何かポーズがあって、あのポーズが嫌いだ。内村先生は、自分自身が頑固なものだから、

「俺みたいな奴はしょうがない。こんな者が救われたから万人は救われるんだ」

と、そういうところは正直だよ、内村先生も。あの人は非常に角（かど）の多い人だから、なかなか親しめない。人格の質がヒルティなんかとおよそ違う。内村先生は、内村先生の大事な使命を果たされたから、それは素晴らしい。何もけなしているわけじゃない。

子供より先に両親が、教え子よりも先に先生が問題です。みんな上が問題。一番問題のないイエス・キリストが我々の主である。それが本当に僕となって動かれた。そして、捨て身でもって我々を愛した。

「キリストと一つ」

ということは、この姿に限りなく進んでいくのがクリスチャンの在り方である、というわけです。キリストにそのように愛されたんだから、救われてしまったんだから、しょうがない。

「完全に救われてしまった。だから、いよいよ救われていく」

ということです。土台は完了して、完了から展開していく。

「まだ完了しないから段々展開していきます」

と、そうじゃない。救いは無条件に来ている。それを、私は「根源現実」と言っている。根源現実では、私たちは罪は無い。相対的現実では罪びとです。根源現実が土台になっているから、これが力をもって動いていく。罪無き世界、聖霊の世界。これは、誰が何といおうと、私ははっきり言わざるを得ない。

どうですか、日曜は楽しいでしょう。お互いに、語るも聞くも、キリストの力、光、生命、愛、義の世界に入れられていく。もう、イエス・キリストというのは説明はつかない霊止（ひと）です。これは本当に限りなきひとです、世界の終りまで。大変なひとだね。そのキリストに、ユダヤ人は躓いているんだから、あきれてしまうよ、全く。

「あれはただの預言者だ」

なんて、何を言っているかと。

それでは、今日はこれでおしまい。